

---

# 文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言 (課題番号19320063) 研究代表者：長谷川信子 2008年3月

---

## はしがき

本書は、神田外語大学言語科学研究センター（CLS）の紀要Scientific Approaches to Languageの別冊として刊行しますが、内容は、昨年度末まで3年間（平成19～21年度）にわたり日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B）：課題番号19320063）の助成により遂行された研究課題『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』（研究代表者：長谷川信子）の成果の一部をとりまとめたものです。

上記の研究課題の背景の認識と目的は、2008年に平成19年度の成果についての『報告書（1）』の冒頭「本研究プロジェクトの概要と課題」でも詳述していますので、ここでは簡単に述べるに止めますが、以下のようなものです。

（1）生成統語理論は文の論理的意味の統語構造（いわゆるIP領域現象）を中心として発祥・発展してきたと言えるが、文の語用的機能や情報構造との関わり（いわゆるCP領域現象）でも統語現象は観察されるわけ、むしろ、そうしたCP領域の現象から、統語構造・操作を考察することで、統語理論研究に貢献する。

（2）GB理論ではIP領域現象を基盤にした「一致」や「移動」といった現象が中心課題だったことから、そうした操作・現象が表面的には限られている日本語からの理論への貢献は限られていた。しかし、CP領域現象に目を移せば、日本語には、主題や取り立て（焦点）、モダリティ、話し手と聞き手の役割、省略など、情報構造や語用的意味と関わる現象が多様な形で表出することが日本語学の記述的研究でも明らかになっており、それらの理論的考察は、統語論への貢献だけでなく、日本語学からの知見が理論体系の中で明確化されることにもなり、記述研究と理論研究の効果的な交流および相補的な発展へとつながる。

（3）本課題研究は研究代表者の長谷川信子1名により申請されたものである（2年次の2008年度からは、神田外語大学大学院にその年度から着任された遠藤喜雄氏に研究分担者として加わっていただいた）が、上記（1）と（2）から明らかのように、個人の研究興味の追求を目的とするものではなく、（1）と（2）の認識・目的を日本および海外の言語学・日本語学研究者に共有してもらい、CP領域現象（主文現象）に広く興味を喚起し、そうした現象の考察に向けて本研究課題を軸に、今後に向けて本科研終了後も、広汎な研究活動の波を言語学研究分野において作ることを狙う。

上記目的の遂行に向け、研究体制には、研究代表者の長谷川と分担者の遠藤氏（および長谷川がセンター長を務めるCLS）を中心に、研究テーマや課題に応じ、国内外からの研究者を招聘し、（国際）ワークショップやシンポジウム・コロキウムなどを開催し、頻繁に意見交換を行ってきました。また同時に、CLSでの不定期研究会（科研サロンなど）により、若手研究者の育成にも力を注ぎ、本研究課題の重要性の今後における浸透を図りました。

本研究課題との関わりでは、本報告書に先駆け、既に、平成20年（2008年）3月に初年度（平成19年度）の活動と成果を取りまとめた『報告書（1）』が刊行されています。また、その他に、以下の2冊が「研究書」として出版されました。

- ◆ 長谷川信子（編著）2007『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』ひつじ書房。（375+x）
- ◆ 長谷川信子（編著）2010『統語論の新展開と日本語研究：命題を超えて』開拓社出版。（385+xiii）

さらに、本課題研究と関係する成果は、上記の刊行物・研究書以外にも、CLSの紀要本体（特に、2008年～2010年のNo. 7～No. 9）にも収録されている論文もあり、3年間という短い期間でしたが、大きな成果をあげることができ、上記（1）～（3）を含め、所期の目標は達成できたと考えています。

こうした成果に加え、本書『報告書（2）』をCLS紀要別冊として刊行しますが、それは、とりもなおさず、本研究が提起した課題が、広く様々な現象、言語を巻き込み、発展し続けていることを示しています。

本報告書は、2部構成となっております。第1部は、本科研の最終研究成果報告書としての機能を持たせ、以下を含みます。

(A) 2010年6月に提出した日本学術振興会への成果報告書(様式C-19)。

(B) 上記の出版物2点(◆長谷川(編著)(2007)ひつじ書房刊、◆長谷川(編著)(2010)開拓社出版刊)各々の「はしがき」「もくじ」と収録した論文の要旨。

上記(A)ですが、指定された「様式C-19」は、6頁以内という紙幅の制限があるため、本研究課題による成果全てを詳細に記述することは叶いませんでしたが、成果全般を俯瞰し、その主な成果は記載してあります。

(B)は、本研究課題との関わりで出版された上記の研究論文集には、この研究の重要性と波及、発展が最も効果的に提示されています。「はしがき」をお読みいただければ、各々の論文集の編纂の背景と位置づけが、また、「もくじ」と収録された各論文の「要旨」からは、研究書全体の概要が把握していただけたと思います。編著書(◆長谷川(編著)(2007)ひつじ書房刊、◆長谷川(編著)(2010)開拓社出版刊)そのものを入手していただけるなら、幸いです。

第2部には、上述した刊行物・研究書の取りまとめ以降(科研の最終年度(平成21年度)の後半以降)に、研究分担者の遠藤喜雄氏をはじめ、研究協力者の井上和子氏(神田外語大学名誉教授;CLS顧問)、木津弥佳氏(ロンドン大学)、田中秀和氏(ヨーク大学)、本多正敏氏(神田外語大学CTEC研究員)から寄稿していただいた論文、および、研究代表者の長谷川の【研究ノート】を収録し、本研究の更なる広がり可能性を示しました。執筆者の方々には、心より感謝申し上げます。ただ、執筆者の方々にお詫びしなくてはならないのは、それらの論文の多くは、昨年度の終了間際に執筆いただいていたにもかかわらず、成果報告書(第1部収録)の作成や、上記研究書の出版作業などに追われ、本報告書『報告書(2)』の刊行時期が予定より遅れてしまったことです。大変申し訳なく思っております。

長谷川の【研究ノート】には、研究課題期間内には研究論文としての刊行には至りませんでした。口頭発表などで言及し、本研究課題の更なる可能性を示した論考を収めました。また、第2部の最後には、2009年6月に神田外語大学で開催された第138回日本語学会での公開シンポジウム『文の周縁部の構造と日本語』での長谷川の発表内容のうちPRO分析と関わる部分(長谷川2008、Hasegawa 2009参照)へのLuigi Rizzi氏のコメントも収録しました。

本科研の研究の遂行にあたっては、CLSの神谷昇研究員、椎名千香子研究補助員には、研究会や紀要や、各種申請書・関係書類・報告書作成などを含め、本研究課題の遂行のあらゆる局面で大いに助けていただきました。本研究がこのような大きな成果を上げることができたこと、心よりお礼申し上げます。

本報告書『報告書(2)』および2008年間の『報告書(1)』、CLSの紀要(Scientific Approaches to Language)本体は、CLSのWebページ(<http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/labo/cls/>)により、申し込んでいただければ、送料のみのご負担で配布しております。

平成22年6月  
長谷川 信子

## Kazuko Inoue (井上和子) Development of Generative Grammar and the Japanese Linguistics

Generative Grammar has developed through five stages, now reaching the final stage represented as Minimalist Program. In this paper the salient characteristics of each stage are pointed out together with its theoretical basis. The study of Japanese in the generative framework started several years later than the inception of Generative Grammar. Under the strong influence of the general trend, Japanese generative grammar started as one of the testing grounds of the theory itself. However, it has come to make unignorable contributions of its own to the development of the general theory since the beginning of the second stage of the Standard Theory. In the present stage of the Minimalist Program, proposing the minimum syntactic devices, a detailed study of CP (Complementizer Phrase), called the Cartography of Syntactic Study has a special import. Since Japanese syntax and semantics involve substantially Topic and Focus Phrase located in the CP zone, the study of CP in relation to the Study of Japanese is expected to influence the theoretical development. Agreement is one of the very few syntactic devices permitted by the Minimalist Program. Japanese without the agreement in terms of  $\phi$ -features (representing person, number, gender) reveals specific characteristics such as free word order. The other types of agreement can be detected in languages like Japanese without  $\phi$ -feature agreement. It is usually the case that Force Phrase has features specifying sentence types such as questions and imperative sentences. However, in Japanese the question particle *ka* or imperative verb ending *siro/se-yo* ("Do!") function as Speech Act modals. As for epistemic modals expressing the speaker's attitude toward the content of the proposition, Japanese uses the presumptive modals like *rasi-i* ("seem"), *yoo-da* ("look like"). It is claimed in this paper that the internal structure of the Japanese CP is richer than the standard case represented by the Cartographic Study.

**Yoshio Endo (遠藤 喜雄)**  
**The EPP is Satisfiable in Japanese Final Particles**

Since Chomsky (1981), various proposals have been made on the nature of the Extended Projection Principle (EPP), requiring clauses to have subjects. In agreement-based languages like English and Greek, depending on the language or on the construction within a language, XP movement or head movement may satisfy the "EPP" requirement (Alexiadou and Anagnostopoulou 1998). Miyagawa (2010) demonstrates that topic/focus plays a role that is computationally equivalent to phi-features in giving rise to the "EPP" effect in agreement-based languages, but he shows it only for XP movement. In this article, I will show that even in topic/focus languages, it is possible to observe the "EPP" effect with head movement as well, thus fully confirming the parallel between agreement and topic/focus. The case we discuss favors the syntactic view of head movement, where head movement affects core syntactic operations and scope relations.

**木津 弥佳**  
**日本語分裂文における長距離依存の容認度について**

Kizu & Tanaka (2009) は、日本語の関係節や焦点の位置に格助詞の現れない分裂文が補文を含む長距離依存の統語構造を持つ場合、その関係節の主部の位置に現れる照応形、あるいは分裂文の焦点に現れる照応形は、関係節内や前提部内の階層上高い方の位置にある節の要素にのみ束縛され、それより下の補文に埋め込まれた要素には束縛されないという観察を行った。このことから、分裂文や関係節における空の演算子は、 $\theta$ 位置ではなく、前提部の埋め込まれたCP指定部に併合され、そこから最も高い位置にあるCP指定部へ移動すると主張した。本稿は、Hoji (1991, 2003, 2006a, 2006b)の見識をもとに、分裂文における再構築(reconstruction)現象に焦点を当て、Kizu & Tanakaで提案した一般化と分析を再考したものである。

**田中 秀和**  
**省略現象の統語的制約について**

ある言語表現が別の言語表現を先行詞として省略される時に課せられる制約とは統語的なものなのだろうか (Fiengo and May (1994), Rooth (1992))、それとも意味的なものなのだろうか (Culicover and Jackendoff (2005), Dalrymple et al. (1991), Merchant (2001))？本稿ではMerchant (2001: 19-25)が指摘する統語的制約についての諸問題を検討し、それらが統語的な制約にとって問題にならないばかりか、実は統語的制約にとっての証拠になることを示す。

**長谷川 信子**  
**【研究ノート】日本語の主語とCP領域についての3つの考察**

本稿は「研究ノート」である。本科研の研究課題では、主文のCP領域を、統語理論的には、文の外縁としての談話や情報構造と事態・命題の表出としてのIP領域をつなぐ統語的領域と位置づけ、その領域での現象が豊富で特徴的であると思われる日本語の主文現象を集中的に記述と理論の両面から考察してきた。特に、文の談話的機能を示す文のタイプの特徴と事態の意味 (IP領域) との関係については、これまでに想定されてきた以上に「主語」はCP領域と深く関わることを、長谷川の一連の研究 (Hasegawa (2009, 2010), 長谷川 (2007a,b; 2008, 2009, 2010a,b) で論じてきた。本稿では、そうした一連の研究の発展として、CPと主語の関係について、以下の3つの現象・考察を提示する：(ア) 中立叙述文の主語について、(イ) ト副詞節と主語について、(ウ) 語彙的主語の有無や人称と主題化プロセスについて。これらの考察・分析には、未解決の部分もあり、更なる考察が必要だが、本研究課題の今後の広がりの可能性を示すものと思う。

**本多 正敏**  
**英語分裂文における部分抽出(Subextraction)について**

本稿では、Rizzi and Shlonsky (2007)で提案されている部分抽出 (Subextraction) の観点から英語の分裂文を考察する。そして、分裂文の焦点位置からの要素の抽出現象には様々な種類があることを示し、この抽出現象の性質が部分抽出に基づく分析によって捉えられると主張する。Rizzi (2004)においてCriteria Freezing (以下 CF) が提案されており、FocusやTopicといった談話位置へ移動した句・演算子はさらに移動することができないとされている。しかし、Rizzi and Shlonsky (2007)によると、イタリア語において間接疑問演算子の中から関係節演算子を抽出することが可能であることから、CF効果を回避する手段として移動した句の中から小さい要素をさらに部分的に抽出できると提案している。本稿では、部分抽出の観点から分裂文における焦点位置からのwh語抽出現象を考察しているRizzi (2008)の議論を、別の種類のwh語

摘出現象にも広げる。そして、焦点位置にDP・PPを残しながらwh語が焦点位置から移動することを示し、この移動現象の性質も部分摘出によって説明されうることを示す。

**Luigi Rizzi**

### **Comments on Nobuko Hasegawa's "Agreement at the CP Level: Clause Types and the 'Person' Restriction on the Subject"**

本稿は、Hasegawa (2009)へのRizzi氏によるコメントであるが、特に、その論文（および長谷川(2008)）のPROがCシステムのFinから認可されるとする分析に対し、イタリア語の di 補文標示の現象から、より直接的に支持できるとする議論を提示している。イタリア語の sembra 'seem' の補文標示は che と di の両方が可能だが、この補文標示の違いと主語のタイプ（語彙主語、PRO、traceの生起と先行詞解釈）が補文内の主題化要素の位置の違いと連動するという、これまでのイタリア語統語研究においても決定的な分析が得られていなかった現象に対し、di がFin要素であり、それがPROを認可するとすれば、主題化要素は、cheの右に、しかし di ではその左に生起することを説明できると論じ、Hasegawaの提案が基本的に有効であることを示した。なお、このRizzi氏のコメントを受け、長谷川(2010)では、PROの分析に対し、Hasegawa (2009)、長谷川(2008)以上に強い議論を提示することができた。（Abstractは長谷川による）